



I-OWA マンスリー・セミナー講演より ファイナンシャル・ヒーリングの 4 本の柱と 72 の「癒やし」の語録

講演： 岡本 和久
レポーター： 赤堀 薫里

ファイナンシャル・ヒーリングの 4 本の柱というお話をします。

運用というものが、より長期的な視点で個人の判断に委ねられる部分が大きくなっています。一方でマーケットのボラティリティーそのものが非常に高まってきている。そのようなことを考えると、今ほど投資の耐久力、続ける力が必要になっていることはなかったでしょう。

長期投資の長旅の中で、いろいろな悪魔が出てきます。それに打ち勝つための癒やしやヒーリングが必要であると思い私はファイナンシャル・ヒーリングということを始めました。この分野を大きなカテゴリーとして 4 つに分類して、それをファイナンシャル・ヒーリングの 4 本の柱としました。

「生涯を通じた投資で成功するためには、飛び抜けた IQ も非凡なビジネス・センスもインサイダー情報もいらない。ただ、必要とされるのは、投資判断のための健全で知的なフレームワークと、感情のブレがそのフレームワークを破壊しないように心掛けることだけである」と「賢明なる投資家」というベンジャミン・グレアムの日本語訳の本の序文にウォーレン・バフェットさんが書いています。

「投資判断のための健全で知的なフレームワークが必要だ」ということは、投資教育の部分です。「感情のブレがそのフレームワークを破壊しないように心掛ける」これは、ファイナンシャル・ヒーリングの部分だといえるでしょう。投資教育と、ファイナンシャル・ヒーリングは車の両輪になって進んでいくべきものなのだと思います。

なぜ資産運用にヒーリングが必要なのか。長い人生を通じての資産運用は山あり谷あり。短期的な資産価値の変動はストレスを生む。ストレスを取り除く癒やし「ヒーリング」によって長旅に耐えられるということです。人生を通じての資産運用は、始めることより続けることが難しい。しかし、続けなければ効果が出ない。





長期投資仲間通信「インベストライフ」

よく最近パフォーマンスを KPI という形で、運用会社の成果を測定するような部分があります。しかし、3ヶ月、半年、1年ごとでは、どうしても短期的になります。本当に測らなくてはいけないものは10年、20年です。やはり10年、20年という長期にわたって理論的に正しく実証的にも整合性があるような運用を長く続けていくことが大事です。年金の運用もパフォーマンス評価は3ヶ月ごとです。個人が使う投資信託のパフォーマンスの評価が、短期的なモノに押し込められていくことに懸念を感じています。

本当に大事なことは、「知」・「情」・「意」だとよく言われます。これをファイナンシャル・ヒーリングでコントロールしていく。そして、それが資産運用の耐久力につながっていく。「知」があればある程度、資産運用は始められる。でも人生を通して続けて行くためには、「情」の部分、感情の部分から発生するストレスをいかにコントロールしていくのか。そしてそれを揺るがない意志「意」が持続されなければならない。そのために必要なことは4本の柱だと思っています。

1本目が「投資理論」です。具体的には、投資理論や投資の哲学にからんだ部分。2本目はそれを実践する「資産運用」、具体的な運用の手法。実践方法。そして3本目が「歴史」。歴史が繰り返すわけではないけれど、歴史から学ぶことは非常にたくさんあります。そして最後が「お金と心」。自分の心の部分とお金との関係をきちんと抑えておくことが非常に重要だと思います。



まず、投資理論と投資哲学です。株式会社というものをきちんと学ぶべきだと思います。株式会社がどのように誕生して成り立ったのか。さらにそこにアダム・スミスの思想。株式と債券の本質とはなんだろうか。企業の成長がどのような形で起こっていくのか。さらには企業統治の問題です。このようなことも含めて株式会社を学ぶ。これはまず投資を始めるうえで一番大事なことだと思います。

講演では、今後、広まっていくであろう「アドバイザーアルファ」についての説明、ファイナンシャル・ヒーリングの4つの柱である、「投資理論」「資産運用」「歴史」「お金と心」について、それぞれのテーマをさらに細分化して解説。また、大変含蓄のある72の「癒やし」の語録を解説くださいました。

最後に岡本さんが最近、講演で聞き感動したという東北大学名誉教授石田秀樹さんの「自然こそが倫理観そのものです。自分の欲求のために、人類の欲求を満たすために自然を変えるのではなく、自然が喜ぶような人間の生き方をするようにしていかななくてはならない。」という、深く考えさせられるメッセージをご紹介いただきました。